

2016 年度日本語教育学会学会賞 受賞コメント

石井恵理子（東京女子大学・教授）

この度は、たいへん重い賞をいただきまして、光栄に存じますと共に、大きな責任を改めて感じております。全く思いもかけないことでしたので、受賞のお知らせの文書をいただいたときには受賞候補の推薦を頼まれたのだらうと思ひ込み、文書の意味が飲み込めず、学会事務局に問い合わせてしまいました。それほど自分には縁遠いものと思っておりました学会賞ですが、改めて賞の趣旨と、今回の受賞理由をしっかりと読ませていただき、地域に暮らす人々や子どもたちの問題について、多様な現場の方々と共に取り組んできたこれまでの活動の全体を見ていただいたことを心からうれしく、ありがたく思います。

80年代の初めに偶然出会った日本語教育に興味を持って現場に入り、90年代にかけて日本語教育の内容・方法、対象、そして目的や理念に至る大きな問い直しの時期に、次々に示される課題に導かれながら進んできました。特に88年から勤務した国立国語研究所日本語教育センターで中国帰国者、技術研修生、全国の地域に急増した日本人の配偶者として生活する人々、日系人労働者、そして複数言語文化環境で育っていく子どもたち等々、急激に広がっていく各地における日本語教育の新たな課題と向き合う機会を得ました。地域ごとに社会環境も人々の置かれている状況も異なり、学ぶ人も教える人も多様な状況で、日本語教育は何を目指し、どうあるべきか。人が社会の中で他者と関わりながら自分らしく生きていくことに深く関わる「ことば」の問題について、地域日本語教育という新しい領域が立ち上がっていく中で多くの議論によって、私自身とても鍛えられました。研究所の地域日本語教育ネットワーク研修や文化庁の地域日本語教育事業、科研費による研究プロジェクトにより、全国の地域の行政やボランティア組織、課題に取り組む多くの人々と共に考え、理念や実践の意味をその地域の人々の現実において検討する場や機会によって得たものは、今も日本語教育に取り組むにあたって、何より貴重な糧となっています。既存の日本語教育の枠組みの応用ではなく、具体の環境にある多様な人々のそれぞれの生活と人生を軸として「ことば」ととらえ、日本語の位置づけやその学びの意味、さらには言語的多数派と少数派の関係性や支援－被支援の問題など、これまでの学校的な枠組みによる日本語教育とは異なる社会型日本語教育のありかた、そして「発達」の視点を必要とする子どもたちのことばの力の育成という、これからも考え続けるべき課題と進むべき方向性を、多くの地域の取り組みから学ばせていただきました。

言語文化圏を越えた人の移動がますます増大している今日、複数の言語文化環境で自分らしく生きていくための学びは、個人の課題であると同時に社会の重要な課題です。その社会が豊かな社会であるかは、そこに生きる全ての人々、特に子どもたちが自分の可能性を拓いていく力を養う機会を十分に与えられ、将来に希望を持って育っているかがその指標となると考えます。自分の命が守られ、日々の生活の充実と、人生の希望を持って自分らしく生きていくために必要な力を得ていくことに、ことばの力は深く関わっています。具体の社会に生きる人々の生活とライフステージへの視点を軸とし、その中で日本語およびその他のことばの位置づけを見定め、どこに向けて、何をなすべきかを模索しつつ、活動と発信を続けていきたいと考えています。

2016 年度日本語教育学会奨励賞 受賞コメント

金孝卿（大阪大学・特任准教授）

このたび、2016 年度公益社団法人日本語教育学会奨励賞を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。日本で大学院を修了し、これまで教育活動と研究活動を継続できましたのも、岡崎眸先生をはじめ、お茶の水女子大学大学院の先輩や研究仲間の皆様、これまでの同僚の皆様、学会活動の中でお世話になった皆様のご指導、ご支援のおかげと、心よりお礼を申し上げます。

成人の第二言語学習者の自律的な学びにおいて、自らの言語学習のプロセスを内省することの重要性は多くの研究で言及されています。その一方で、一人で内省を行うことの難しさも指摘されており、他者との学び合いの有用性が議論されています。認知科学の分野において、問題解決における「協働」の概念は、相互依存的で互恵的で創造的なプロセスとして捉えられています。日本語教育においては、ことばを媒介として学習者が仲間（peer）と協力して学習課題を遂行しながら学ぶ方法として、ピア・ラーニング（協働学習）が取り上げられています。こういった背景を基に、単著『第二言語としての日本語教室における「ピア内省」活動の研究』（2008 年、ひつじ書房）において、日本語学習者が学習者仲間と対話することによって、協働的に双方の内省促進を図る教室活動について具体的な活動デザインを提案しました。

他者との対話による双方の内省促進には、「課題遂行に関する情報の共有（認知的側面）」と「具体的な指摘や褒め（社会的側面）」が相互依存的に関わっています。この条件を含むインタラクティブを通して参加者は、課題遂行のプロセスで互いの理解のずれを発見し、自己の学習上の新たな課題への焦点化を促すのです。この原理に基づき、社会的関係の構築に支えられながら意味のある情報共有のための場づくりとして「ピア内省」の活動デザインを提案しました。

また、ビジネスコミュニケーション教育研究、教師の成長とコミュニティ形成に関する研究においても、これまでの知見を活かしてきました。前者に関しては、研究仲間とともに、グローバル時代の人材育成を目指したビジネスコミュニケーション教育のための「ケース学習」を提案しました。「ケース学習」とは、事実に基づくケース（仕事上のコンフリクト）を題材に、設問に沿って参加者が協働でそれを整理・討論し、時には疑似体験しながら考え、解決方法を導き出し最後に一連の過程について内省を行うまでの学習です。書かれた事実をもとに、自身の知識や経験から状況を把握し、多様な視点で分析し各自の「結論」や「解決策」を導き出すことを目的としたものです。また、後者の教師の成長とコミュニティ形成に関する研究においては、これまで外国人の若手日本語教師研修のためのポートフォリオの開発や、対話型教師研修におけるティーチングポートフォリオの役割と教師の専門性向上について継続的に研究を行ってきています。

成人の第二言語学習者の学びの本質や教師の成長への探究を通して、より良い教育実践とそこに携わる主体すべての幸せを目指す、というのは研究者・教育者としての使命だと思っています。予測困難な時代において、その道程は遠いですが、更に裾野を広げ、少しでも役立つ知見が得られるよう、研鑽を積んでまいりたいと存じます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

2016 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

中俣尚己（京都教育大学・准教授）

受賞を知った時は嬉しいと同時に、やや意外という感想を持ちました。というのも、最も大きな受賞理由であると思われる『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』（以下、『ハンドブック』）は、売れ行きは好調であるものの、アカデミックな世界では評価されにくいと感じていたからです。学会から賞を頂けたのは予想外でした。

実は私は学生時代、ライトノベル作家になりたいと思っていました。『ハンドブック』は私にとって初めての本でしたが、ライトノベルではありません。表紙に綺麗な絵もありませんし、アニメ化もされないでしょう。この本が出版された時、私の人生はこれで良かったのだろうかという疑問が沸き起こったことも事実です。しかし、今ではこれで良かったのだらうと思えています。

『ハンドブック』を書くにあたっては色々なことを考えていましたが、その中の一つに、多くの現場の先生に使ってもらいたいという気持ちがありました。学生時代には実際にライトノベルを書いていたのですが、拙い話であっても web で発表すれば何かしらのリアクションがありました。一方、大学院生時代に何本かの論文を雑誌に掲載したのですが、全くと言っていいほど反響がありませんでした。もちろん、web 小説と論文ではそもそも受け止め方が違います。私の論文が未熟だったということもあるでしょう。しかし、院生だった私は確かにこう思っていました。「こんなの、思ったのと違う。」読者とつながっているという感覚が得られなかったのです。

だから、コロケーションの重要性に気づいた時、私はそれを小出しにして論文として発表していくというやり方を捨て、網羅的に調査し、教育現場に直接届くような形態でパッケージ化することを選びました。研究者としては2、3のケースを調査して論文にしていくというスタイルが王道ですが、現場の教師としてはそれを読んだとしても、実際に授業で活用する前に忘れてしまいます。ハンドブックを創るプロセスとして、まずパイロット版を作成し、日本語教育の現場の方から意見を集めて改良を重ねました。日本語の研究者の意見は取り入れませんでした。これは読者層を意識しての選択です。その結果でき上がった『ハンドブック』はお陰様で非常に大きな反響を頂きました。本当に様々な声を聞くことができ、ライトノベルの世界以外でもこういうことがあるのだなと思いました。また、意外なことに、日本語文法の研究者からも肯定的な反応を頂きました。これは、教育現場に向けたものであっても学術的な価値を持つことがあるということを示しているのだらうと思います。

『ハンドブック』の制作にあたっては多くのことを学びました。今後も研究で得られた知見を現場で使えるようにパッケージ化し続けていく予定です。すでにハンドブックの第2弾と言える『コーパスから始まる例文作り』が刊行されました。私は小説を書く時に3部作にすることが多く、実は当初から第3弾の構想があります。ただ、第3弾はただのハンドブックでは新鮮味に欠ける気がしますので、今までにないものを創りたいと考えています。もちろん、コロケーション研究以外にも色々な研究のプランがあります。私はすぐには役立つ基礎研究を蓄積することも重要だと考えていますが、いずれはそこで得られた知見を皆様に「使って」頂けるように、色々なモノを創り続けていきたいと考えています。

2016 年度日本語教育学会功労賞 受賞コメント

杉戸清樹（国立国語研究所名誉所員）

日本語教育学会功労賞を受けることになったというお知らせは、郵便封書でいただきました。二度、三度読み返すあいだ、我知らず息を詰めていたようです。「功労賞？」「この私がどうして？」。呼吸を整えるあいだも、二つの疑問が頭をめぐり続けていました。...というのが、学会の表彰委員会からここに記すようにお求めのあった「受賞の連絡を聞いたとき」の様子です。全く経験したことのない時間であり、このさきも記憶に留まる貴重な時間に違いないと思っています。

疑問の一つは「功労賞？」でした。学会賞や論文賞があることは承知していても、功労賞というのは聞きしことがありません。この疑問は、後日あらためて学会のホームページを見て解消されました。学会の表彰制度が改まるなか、2016 年度分から功労賞が新設されたのを新着情報で知ったからです。「日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に」贈るという賞の趣旨も知りました。

しかし、そういう事情を知れば知ったで、むしろそれゆえに、「この私がどうして？」というもう一つの疑問は、前より大きく重たいものになりました。日本語教育学「会」とは異なり日本語教育「界」での業績や貢献を評価していただいたこと、そしてそういう賞の最初の授賞者としていただいたことによって、「この私がどうして？」という疑問あるいは戸惑いは、このさき自らくりかえし問わねばならない大きく重たい問い、つまりは課題になりました。

疑問から姿を変えた課題は、学会のホームページや授賞式の配布資料に掲げていただいた「授賞理由」を読んだとき一段とはっきりしたようです。「授賞理由」は、勤務した研究機関で携わった調査研究、省庁の委員会や審議会で参画した議論や答申、日本語教育学会を含めたいくつかの学会での活動などについて、当人が恐縮するばかりに丹念に丁寧に拾い挙げてくださっています。そのこと自体について深くお礼を申し上げます。

その上で「授賞理由」の中では、「領域にまたがる活動を通して複合的な視点で『言語・社会・教育』をつなぐことをめざし...」、「学術的知見と行政、社会をつなぎ...」という評価をしてくださっています。文字通り分に過ぎたお言葉として、重ねて恐縮しつつ、ありがたく読みました。

その一方で、私の課題が一段とはっきりしたと感じているのもこのあたりです。丹念に拾い挙げてくださったような仕事をしてきたとは言っても、一人だけでできたものは何一つありません。それぞれ、多くの方と一緒に、つまり、いろいろな領域の方々と様々な視点からの問題意識や意見を交えることによって進めたものばかりです。「領域にまたがる」「複合的な視点」は、むしろ必要不可欠であるために当然に求められ、場合によってはあらかじめ準備されていた環境だったと言わなくてはなりません。そのような環境で仕事に参加できたことは幸いなことでした。

しかし、このように考えるとき私の課題は一層深まります。そのような環境に臨んだとき、「領域にまたがる」姿勢は私自身にあったか、「複合的な視点」を私自身は持っていたか、さらには日本語教育学会が「使命」のキーワードに掲げる「つなぐ」にふさわしい姿勢は私自身にあったか。自ら問うても忸怩たる思いがつのるばかりです。このさきの私の課題とするほかありません。

授けていただいた賞に「この私がどうして？」などと問うた無礼はどうかお許しください。

このたびは、意義深い功労賞を授けていただき、本当にありがとうございました。

2016年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

内藤真理子（神田外語大学留学生別科・講師）

小森万里（大阪大学 日本語日本文化教育センター・准教授）

私達は、アカデミック・ライティングの指導について長年興味を持ってきました。それは、学生たちが熱心に課題に取り組み、そして私達も彼らに負けない熱意で指導を行っているものの、学生と教員が要した膨大な時間に見合う効果が出ていないように思えたからです。もちろん、アカデミック・ライティングの能力は一朝一夕で成るものではなく、繰り返し鍛えていくことこそが肝要だとは思いますが、しかし、学生の日々の積み重ねだけに頼るのではなく、我々も指導の妥当性を検証し、改善をしていくべきなのではないかと考えました。

そのため、「誤用」のタグ付けを行ったレポートのデータベースを作成し、それを使って、フィードバックの効果や一貫性についての論文を執筆しました。その際、重複が少なからず存在しており、しかし、そのことに焦点を当てて指導したことがなかったことに気づきました。ここから、私達の新しい研究が始まりました。

着想を得てから、論文提出まで一年以上かかりました。論文が8割程度完成したところで、議論の甘さに気づき、このままでは教員の皆様の参考となる論文にはならないと考え、アウトラインを考え直し、追加調査と大幅な修正を行うという山を越え、やっと提出に漕ぎつけました。

何度も推敲を重ねてはきたものの、『日本語教育』への論文掲載は、私達にとっていつか実現させたい大きな目標であり、掲載される自信はありませんでした。ですので、「条件採用」の通知を拝読した新幹線の中では、思わず小さく叫んでしまったほどでした。その後、「条件」の二文字が取れたときには、望外の幸せを感じました。さらに、今春、論文賞授賞のお知らせをいただき、天にも昇る気持ちになりつつも、私達の論文は賞に値するのだろうかと不安にもなりました。

学生の労に報いる指導がしたいという思いでアカデミック・ライティングの研究を始めましたが、今回は重複の分類をしたにすぎず、どう教育の場に活かしていくのかについては、いまだ「今後の課題」です。私達の研究は緒に就いたばかりです。このたびの論文賞は、「ここで足踏みするな、研究に邁進せよ」という学会から私達への叱咤激励なのだと思われようと思います。

私達がこの論文を執筆することができたのは、熱心に課題に取り組む学生たち、そして、急遽行った調査にも関わらず快く協力してくださった先生方がいらっしゃったからです。また、査読の先生方が、私達の論文の整合性が取れていない部分を指摘してくださらなかったら、論文賞を受賞することはなかったと思います。多くの方々のおかげで、この論文を完成させることができました。関わってくださったすべての方々へ心より感謝申し上げます。

私達は、諸先輩方が築いてきてくださったソフトとハードの両面にわたるさまざまな財産をもとに日本語教育に携わっております。ささやかであっても、私達も、日本語学習者の皆様、教員の皆様のお役に立つことができたなら、こんなに嬉しいことはありません。また、私達は、日々の授業準備や介護や子育てなどに追われる中で、平日の夜や週末の朝などに細切れの時間を捻出し、議論を重ねてきました。牛歩ながらもコツコツと前進しつづけた先に、論文賞という明るい希望が待っていてくれました。このたびの私達の受賞が、多忙な状況の中で研究活動をされている先生方を少しでも勇気づけるものとなれば幸いに存じます。

2016 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

古川智樹（関西大学・准教授）

手塚まゆ子（関西大学・留学生別科特任常勤講師）

この度は「論文賞」という大変栄誉ある賞をいただき、本当にありがとうございました。論文賞の受賞は私には縁遠いものであると思っていましたし、いつか取れるといいなくらいにしか思っていなかったのですが、受賞のご連絡をいただいたときは大変驚きました。しかし、それと同時に関西大学の留学生に対する日本語教育で多くの先生方や事務職員さんのご協力のもとで取り組んできたことが「論文賞」という 1 つの形として報われたということに喜びを感じるとともに、今後さらに現在の取り組みを発展させていきたいという思いが強くなりました。

今回受賞した論文内容にもある反転授業の取り組みに関しては、日本語予備教育機関で、1 年間という短い期間で大学・大学院へ進学させるための集中的な日本語教育を行う中で、教師主導ではなく、学習者中心の授業を行うためにはどうすればいいか悩んでいたところで、「反転授業」に出会ったのがきっかけで、教育機関で共に働く先生方に相談し、開始しました。反転授業に関する著書の中で Bergman & Sams (2014:3) は 1 つの質問を読者に投げかけています。

“What is the best use of face to face time with students?”

(学習者と対面している時間を最大限に活かす方法は何か：筆者読責)

その質問に対する答えを考えたときに、教室内での教師の説明を映像化することによって授業外での学習（予習）とし、対面でしかできない学習者間の相互行為（発話機会の創出）、教員によるフィードバック（学習者からの質問受付も含む）により多くの時間を費やすべきであろうというのが私の答えでした。ただ、反転授業の導入によって教室内での教師の役割は知識の伝達者から学習者の学びを支援する援助者、学習を促すファシリテーターへと大きく変わり、また、学習者にとっても予習課題が課され、授業内の活動自体も従来の教育方法とは異なるため、チームティーチングを行う教員、学習者双方にとって戸惑いも大きかったのではないかと思います。特に反転授業導入当初は、学習者の動画視聴率が上がらず、また、教員からもどのように授業を運営すればいいかわからないといった戸惑いの声も多くあり、試行錯誤が続いたことを覚えています。しかし、日本語教育における最適な反転授業の形はどのようなものか、模索、試行、改善、すなわち PDCA (plan-do-check-act) を繰り返す中で、未だいくつかの問題はあるものの、現在は学習者の満足度も上がっており、日本語教育における反転授業の形が見えてきたように思います。

最後に、今後に向けてですが、現在、反転授業の取り組みは世界中に広がっており、数多くの実践・研究報告がなされていますが、反転授業の唯一絶対の方法はなく、また、反転授業の教育形態が理想の教育方法というわけではないと考えます。しかし、教員が中心となる講義形式の説明は講義動画で行い、授業での対面の場を学習者の産出を中心とした活動に費やすという学習者中心の教育方法は、取り組むに値する教育方法であるとも考えています。教育方法の変換による教師・学習者の戸惑いに対する対処、反転授業下での授業内で扱うべき活動内容等、課題は未だ多くありますが、日本語教育にとって最適な反転授業の形をこれからも探求し、引き続き、効率的かつ効果的に学習者の日本語運用能力を高めていけるよう模索していきたいと思っています。

2016 年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

李澤熊（名古屋大学・准教授）

この度は 2016 年度学会活動貢献賞を賜り、大変光栄に存じます。受賞者 13 名を代表いたしまして、心より御礼申し上げます。

事務局の方から受賞のご連絡をいただいた時、正直「なんで私が？」と思いました。後で他の受賞者の方のお名前を知った時は、著名な先生方ばかりで、大変恐縮で申し訳ない気持ちでいっぱいでした。今回の受賞は「今後の日本語教育のためにもっと頑張れ」という激励のメッセージをいただいたのだと思っております。

私は日本語を学習者の視点（非母語話者の立場）で研究しております。そういうこともあり、日々様々な難題にぶつかりながら取り組んでいます。その中でも最も大変なことは、日本語に対するいわゆる内省判断が難しい点です。

日本語教育の世界では、当たり前のようなことも含め、様々な言語現象が問題になったりしますが、日本人（母語話者）であるために、かえってそういう現象に気づかないこともあると思います。これは、日本語という言語を客観的な立場から観察する力と関係があると考えられます。

普段日本人（母語話者）がなかなか気づきにくい日本語の現象について、日本語を外国語として、つまり意識的に覚えた非母語話者のほうがよく気づいたりするケースもあると思います。そういった意味で、日本語教育において非母語話者からの視点・観点も大事な役割を担っていると思います。

最後に、学会誌委員会メンバーの皆様にも深く感謝申し上げます。論文査読の過程において困った時は、的確なアドバイス・ご指示をたくさんいただきました。貢献をしているというより、逆にいろいろ勉強させていただいたという気持ちのほうが強いです。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

今回の受賞を励みに、これからも日本語教育のお役に立てるよう取り組んでまいります。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。